『週刊ポスト』2019.9.9(月)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第92回 『ザ・ヒット・パレード』と「ミスター・ベースマン」

昭和34年6月25日、戦後プロ野球史にとって最大級のイベントとなった天覧試合が開催されました。長嶋茂雄の劇的なサヨナラホームランで決着をみたわけですが、その8日前、開局したばかりのフジテレビで始まった番組が『ザ・ヒットパレード』でした。おそらく「ザ」という冠詞を配した日本で最初のテレビ番組だと思います。

番組を先導したディレクターは、「ひっぱれー、ひっぱれー」と歌われるテーマソングを自ら作曲したすぎやまこういち（後の作曲家）ですが、昭和26年日本公開の米国映画『ヒット・パレード』（原題・A Song Is Born）から番組名を借用し、英語の原題にあやかり既存の流行歌とは一線を画す新しい若者の歌を発信していこうといった気概を「ザ」の一文字に込めていたのだと思います。当初はスポンサーがつかず、出演者を提供していたナベプロの持ち出しだったようですが、昭和36年頃になると、スポンサーもつき、番組中に生CMが入るようになります。

スポンサーの一つだった女性用ストッキングや女性用下着メーカー、内外編物（現・ナイガイ）の生CM用に使われるマネキン人形を裸体のまま運び込んでいたのが、当時、広告代理店の宣弘社（テレビドラマ『月光仮面』の制作会社）に勤務していた阿久悠と学生アルバイトの上村一夫（後の漫画家）でした。ちょうど女性のシームレス・ストッキングの良さが日本でも認められ始めた頃で、靴下の後ろ側に縫い目のないシームレスの普及に、この生CMも貢献したことでしょう。

翌37年2月に発売されたザ・ピーナッツの『ふりむかないで』で歌われる「いまネ　靴下なおしてるのよ　あなたの好きな　黒い靴下」（詞・岩谷時子）の歌詞の背景には、この内外編物のCMの影響があったのかもしれません。あくまでも個人的な推測にすぎませんが。

番組中でピーナッツとともに活躍していた「踊る指揮者」こと、スマイリー小原が『ミスター・ベースマン』の日本語カバーをピーナッツや九重佑三子、渡辺トモコなど女性歌手を相手にしゃがれた声で「ボンボボボン」と楽しそうに歌っていた映像が甦ります。

昭和38年、当時18歳だった英国出身の男性アイドル、ジョニー・シンバルが自作自演した『ミスター・ベースマン』は日米で大ヒットしましたが、日本語盤のメインボーカルは、麻生京子（後の麻生レミ）なども含め、ほとんど女性でした。所属レコード会社との関係もあってか、あいにくスマイリーがベースパートを歌うカバー盤は発売されず、最も売れたバージョンは九重佑三子がリードをとり佐野修がベースパートを歌ったパラダイス・キング盤でした。

この曲がヒットする10年ほど前、「戦後強くなったのは女と靴下」という言葉が流行していたようですが、昭和39年の東京五輪を前に、歌の世界でも女性が主導する歌詞やシーンがしっかりと根を下ろしていました。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中